



山鹿を愛した宝塚出身の大スター（一九四〇～一九九九）

こ  
う  
づ  
き  
の  
ぼ  
る  
上  
月  
晃

山鹿温泉を産湯にして育った歌と踊りの大好きな少女は難関の宝塚音楽学校に合格し、タカラジェンヌとして天性の素質を開花させた。上月は宝塚歌劇団を退団後も大スターとして七〇年代から九〇年代にかけて主要な劇場で数々のミュージカルに主演し、パリのミュージックホールでもワンマンショーを成功させた。だが、円熟期に差し掛かった平成十一年に志半ばで無念の死を遂げる。―神様お願い―上月は人の命の尊さを歌に託し、ファンに大きな感動を与え風のように去った。享年五十八歳。終生山鹿を愛した上月晃が八千代座の復興に尽力し、機会あることにふるさとをPRして観光都市山鹿の発展に尽くした功績は大きい。

## 生い立ち

## 歌や踊りが好きな少女時代

上月晃（本名原口貴美子）愛称ゴンちゃん。彼女は昭和十五年（一九四〇）四月六日、写真店を営む原口辰起とカメコの三女として生まれました。自宅が末廣温泉の隣にあつたことから、彼女はこの温泉を産湯にしていました。原口家は、男二人女三人の五人兄弟姉妹でした。器量よしの両親の血筋を受けた原口家の女の子は、美人三姉妹として山鹿の町では知らないものはいないほどだったといえます。

幼い貴美子は活発な子でよく迷子になるので、迷子札をつけられていたこともありました。ある日、姿の見えない貴美子を家族が心配して探し回った時のことです。温泉旅館の階段に小さな泥んこの足跡を見つけて後を追ったら、なんと大きな部屋の真ん中で昼寝をしているではありませんか。小さい時から大物と、みんな大笑い。物おじせず、好奇心旺盛な女の子でした。

貴美子は小学生の時、町内の日本舞踊の先生に姉の眞由美と通っていました。八千代座で踊りの発表会に出たこともあります。いわば彼女の初舞台は八千代座だったのです。父の辰起は家に友人が来ると、よく貴美子を呼んで踊りを披露させていました。

「なぜ、私を呼ばずに貴美ちゃんの踊りばかり見せるのかな、と幼心に不思議に思っていたけれど、きつと妹の方が上手だったからでしょうね」と、眞由美は笑います。歌もうまい



七五三（右が貴美子）山鹿市大宮神社にて

貴美子は温泉祭の時に温泉広場で得意の美空ひばりの歌を歌ったこともありました。一度見たり習ったりしたものはすぐ自分のものにし、毬つきやお手玉、なわとびなど何をやっても器用で元気な女の子でした。

姉、弟と  
（上から3番目が貴美子）

## 山鹿中学から山鹿高校へ 体操との出会い

昭和三十一年（一九五六）四月、貴美子は山鹿中学を卒業して山鹿高校に進学し、徒手体操部（のちの新体操部）に入部しました。そのころ山鹿高校徒手体操部は九州の実力校で、常に全国大会で優勝を争う名門校でした。二年生になると体操部の中心選手に成長し、女子体操部は昭和三十二年八月にインターハイ準優勝、同年十月に国体準優勝の成績を収めています。その一方、貴美子は声が大きく歌も得意なので、人の足りない時に合唱部から参加を頼まれ、兼部している時期もありました。

高校のころ貴美子はクラスの人気者でした。体操部の親友高野勲子の話によれば、彼女は得意のゴリラやエテ公の物まねでクラスの友達をよく笑わせていたそうです。色白で美人の彼女、さてもそのギャップが一層笑いを誘ったのでしよう。

昭和 32 年 5 月  
城北体操大会にて団体 1 位

そこでついたあだ名が「ゴリちゃん」をもじった「ゴンちゃん」だったようです。(北原白秋の詩「曼珠沙華」で、「ごんしゃんごんしゃん、何処へ行く…」というくだりがあります。柳川地方の古い方言で「お嬢さん」のことを「ごんしゃん」とよぶので、それから転じてつけたという説もあります。家族は「ゴントクシ」から来たあだ名と確信していました。)

彼女は男子生徒にもよくモテたといえます。友人が覚えているだけでも七、八人の男子生徒が貴美子の自宅や学校の下駄箱にラブレターを届けました。しかし封も切らずに家族や友人に返事を頼んだこともあり、このころの彼女を虜にしていたのはダンスだけだったようです。



山鹿高校徒手体操部のメンバーと  
(後列右端が貴美子)

## 宝塚との出会いと旅立ち

貴美子は高校二年のある日、華やかな宝塚を紹介する『毎日グラフ』の記事に目を留めました。「歌と踊りと芝居ばかりできる学校があるなんて、私に合っているかも。」これが宝塚との出会いでした。父親は反対しましたが、母がお金を工面して宝塚音楽学校を受験しました。昭和三十三年(一九五八)春のことです。

山鹿高校のセーラー服に身を包み、貴美子は姉や友達に見送られ単身兵庫県宝塚市に向かいました。一般に宝塚音楽学校へ入学するために、小さいころから血のにじむような努力をする姿は、

今も昔も変わりません。しかし、貴美子には何の準備もありませんでした。あるとすれば、子どものころから歌や踊りが大好きだったことくらいでした。まさに無謀ともいえるような挑戦でした。

彼女は後に雑誌社の取材で語っています。

「落ちてもともと。友達へのみやげ話くらいにはなるだろうと思っただけの宝塚、私はラッキーだった」レオタードを着こなしたお嬢さん受験生の中に交じって一人、貴美子は「山鹿」と書かれた高校の体操服で試験を受けました。天真爛漫で物おじしい貴美子とはいえ、おそらく会場では浮いてしまっていたことでしょう。居並ぶ試験官の前に「何か得意なことをしてみせて」と言われ、曲に合わせて即興で踊り、バック転をしました。後日談ではそれが「おもしろい子だ」と試験官たちの目を引いたようです。

試験の終わった貴美子は、帰りの汽車まで時間があるので、宝塚歌劇を見ることにします。最初に間違えて隣の古い演芸場に入ってしまった、途中で気付いて宝塚歌劇団の劇場に入り直すという失敗の後、初めて宝塚のレビューを目にします。「ああ、こんなざらびやかで華やかな舞台。私はとんでもない無謀な受験をしてみました。受かるなんてとても無理だわ」貴美子は自信をなくして山鹿へと戻ります。ところが後日…合格の知らせが届いたのです。田舎の県立高校から宝塚音楽学校へ、山鹿高校始まって以来の快挙でした。

## 宝塚音楽学校 水を得た魚

昭和三十三年(一九五八)四月、貴美子は宝塚音楽学校に入学しました。彼女はグラフ雑誌で紹介されていた憧れの宝塚歌劇寮

(現スミレ寮)に入ったのです。同期生は五十人。その中には、のちに宝塚「3Kトリオ」として人気を競い合う甲にしぎ、古城都の姿もありました。

音楽学校では二年間、声楽、日舞、バレエ、モダンダンスなどのほか、一般学校と同様に歴史や英語、社会も学びます。

音楽学校の生徒はお互いライバルでもありません。ほとんどの生徒が入学前から歌や踊りの英才教育を受け、入学後も家族の援助で寸暇を惜しんで個人教授に通います。貴美子は英才教育も個人教授も受けたことはありません。あるとすれば幼いころから「原口のキミちゃん」と近所の人に可愛がられ、温泉祭や灯籠まつりで踊っていた経験と、山鹿高校体操部で鍛えた体力です。彼女は音楽学校での日々を楽しく過ごしました。

しかし、彼女を悩ませた問題が一つありました。熊本訛りです。演出家から訛りを直すよう指導された翌日にすっかり直してきただというエピソードもあるのですが、実はさすがの貴美子もずいぶん苦労したようです。音楽学校では東京出身の同期生に「いなかっぺ」と怒鳴られながら標準語の特訓をもらったといいますが、舞台を下りれば、彼女は素顔の「原口貴美子」に戻るので、家族の前でもなるべく訛らず話すようにずっと努力を続けていました。



宝塚歌劇団に入団したころ  
(昭和35年12月)



宝塚音楽学校時代  
(入学4ヶ月、昭和33年7月)

## 宝塚歌劇団へ 上月晃誕生

昭和三十五年四月、貴美子は宝塚音楽学校を卒業し宝塚歌劇団(研二)のメンバーとしてデビューしました。デビューはしたものの、二年は月給も少なく生活は大変でした。しかし、宝塚は自分で選んだ道ですから、親に負担はかけられません。貴美子は親からの仕送りを断りました。優雅な生活を送る同期生が多い中で、彼女は切り詰めた日々を過ごしていました。

宝塚音楽学校の生徒は、初舞台を前に自分の芸名を付けなければなりません。山鹿にいる家族からも、それらしい芸名をいくつか送ってきましたが、どうもしっくりきません。あれこれ悩んでいるうちに同期生で自分が最後に残ってしまいました。そんな時、新聞を見ていたら「上月」という文字が目につきました。「月が昇る」これだと思い「晃」という好きな文字を自己流に「のぼる」と読むことにしました。「上月晃(こうづきのぼる)」月が輝いて上り始める。貴美子が宝塚での決意を込め、自らつけた芸名です。

タカラジェンヌ上月晃は、昭和三十五年(一九六〇)「春の踊



公演のようす (昭和38年)



楽屋にて

## ちょっとコラム①

### 宝塚音楽学校と宝塚歌劇団

宝塚音楽学校は二年制の宝塚歌劇団団員養成所。大正二年(一九一三)宝塚歌唱隊として発足、昭和二十一年(一九四六)宝塚音楽学校に校名を変更し、平成二十五年(二〇一三)創立百周年を迎えた。「清く正しく美しく」を校訓に、舞台人としての基本と女性としての教養を学ぶ。近年の入学試験競争倍率は約二十倍で「東の東大、西の宝塚」といわれる難関である。

宝塚歌劇団は未婚の女性だけで構成された歌劇団。団員は例外なく宝塚音楽学校の卒業生で占められ、「タカラジェンヌ」の愛称で親しまれている。宝塚大劇場(兵庫県宝塚市)、東京宝塚劇場(東京都千代田区)を中心に公演を行っている。花、月、雪、星、宙の五つの組と専科に分かれている。八千草薫、越路吹雪(故人)、寿美花代、大地真央、黒木瞳など多くの人気スターを生み出している。

り」で宝塚の初舞台を踏みました。同年五月の公演「三文アムール」で代役を掴み、翌年九月「三銃士」では難役を見事にこなしてその月の新人努力賞をさらいました。ソロで歌った歌唱力が認められ、昭和三十六年のミュージカル「明日に鐘は鳴る」では主役に抜擢されました。音楽学校ではそれほど目立った存在ではありませんでしたが、同期生の中では異例の出世でした。その後、昭和三十九年芸術祭奨励賞を受賞し、「ラ・グラナダ」「オクラホマ!」「追憶のアンデス」「シルクロード」など宝塚の歴史に残る舞台に名を残します。中でも「オクラホマ!」で、上月の演技はアメリカから来ていた演出家デ・ラップから絶賛され、化粧も男っぽいやつに仕上げ、それまでの宝塚の男役とは一味違う新境地を開いたと言われます。



はじめてのプロマイド  
(昭和36年)

## 宝塚からの羽ばたき ～さらなる飛翔へ～

デビューから瞬間に八年が過ぎました。上月は今や人気を不動のものとしていました。しかし、彼女は決して現状に満足せず、貪欲に自分の可能性に挑戦したかったのです。昭和四十三年、上月は劇団に退団を申し入れました。ところが宝塚のドル箱スターとなった上月の退団がすんなりと認められるはずもなく、一度はそれを撤回せざるを得なくなりました。紆余曲折を経て退団が承認されるまでにはそれから二年という時間を要したのです。

昭和四十五年(一九七〇)五月、上月はようやく退団を認められ独立しました。デビューからすでに十年の歳月が流れていました。サヨナラ公演「ザ・ビッグ・ワン」(新宿コマ劇場)では、ファンが買い占めたため都内の花屋から花が消えたという逸話が残るほど、宝塚ファンに愛されていました。タカラヅカファンで知られる浜村淳は新聞で「『ベルサイユのばら』はそれは素晴らしい。ただ、残念に思うのはあのオスカル役を今は亡き上月昇さんで見ても良かった」と述べています。(日本経済新聞「我が心のタカラヅカ 故・上月昇さんとの思い出」平成十四年)

退団後の上月は、自由に大空を羽ばたく白鳥のように躍動しました。本格的にテレビ出演した大型時代劇「大忠臣蔵」(三船敏郎主演)の女忍者お蘭役では、本格的な立ち回りは初めてだというのに「俊敏で覚えが早い」と剣技の師匠から絶賛されました。

昭和四十六年放送のNHK大河ドラマ「春の坂道」(萬屋錦之介主演)では、関白秀次の側室お万の方役で芯の強い戦国女性を見事に演じ、お茶の間の話題をさらいました。上月は、日本を代表する時代劇の大スター三船敏郎、萬屋錦之介と共演し、お茶の間の人気スターとしても活躍したのです。

得意のミュージカルでは、「マイ・フェア・レディ」のイライ

ザを皮切りに「慕情」「シカゴ」「ナイン」など数々の作品に出演します。中でも「屋根の上のバイオリン弾き」のゴールデ役、「ラ・マンチャの男」のアルドンサ役はまさに上月の当たり役でした。「ラ・マンチャの男」では、昭和五十四年（一九七九）に文化庁・芸術祭優秀賞を、昭和五十八年（一九八三）に菊田一男演劇賞を受賞しています。

## 愛する山鹿 くなくかじかふるせよ

上月はその名のとおり、夜空に輝く満月のように光り輝きました。昭和五十年（一九七五）から三年間、パリの伝統あるミュージックホール「フォリー・ベルジュール劇場」で東洋人として初めてワンマンショーを開き、満員の観客の大きな拍手を浴びました。

帰国後は、敬愛するフランスのシャンソン歌手エディット・ピアフの曲を全国百八十のステージリサイタル「ピアフ・命燃え尽きて」で熱唱し、ファンを感動させました。

そのような活躍の陰で上月の心にはいつも愛するふるさと山鹿があり、家族、恩師、友人がいました。上月は寸暇を惜しんで山鹿に帰り、大好きな西瓜をかじりながら家族や友人と昔を懐かしみました。

平成七年、上月は熊本県立劇場でリサイタルを開きました。無名時代を知る友人達から見れば、旧友の原口貴美子が大



ザ・ビッグワン公演

## ちょっとコラム②

### フォリー・ベルジュール劇場

フォリー・ベルジュール(Folies Bergère)はパリのミュージック・ホール。マネやロートレックの画題になるなど、パリのナイトシーンを代表する伝説的なホールである。往年の世界的スター(ジャン・ギャバン、ジョセフィン・バーカー、チャーリー・チャップリンなど)も多数出演した。

スター上月晃として帰ってきた感動の再会です。しかし上月はスター気どりなど全くなくて、リサイタルの幕間に友人が灯笼踊りを練習中の教え子を伴って楽屋へ訪ねても「あくびでもするように、伸び伸びと唄えばよか」と気さくに歌い方のレッスンをしてくれたといいます。



フォリー・ベルジュール劇場  
(NOBORU KOZUKI GON CHANのネオンが輝く)



山鹿市制 30 周年記念八千代座  
復興チャリティリサイタル  
写真提供 柴田洋一



ピアフ公演 (郵貯ホールにて)  
写真提供 柴田洋一

## 運命 〜命燃え尽きて〜

上月は今や芸能界のあらゆるジャンルで活躍する大スターとして、円熟期を迎えています。平成十年（一九九八）には「フォーティーセカンド (42nd) ストリート」のドロシー・ブロック役で、演劇評論家たちが選ぶその年の日本のミュージカル女優賞一位に選ばれました。しかし、好事魔多しというにはあまりにも過酷な運命が上月を待っていたのです。

平成十年（一九九八）二月、上月は癌を患い極秘で手術を受けます。しかしコンサートも舞台もキャンセルせずにすべてこなしていました。九月には「屋根の上のバイオリン弾き」で西田敏行の演じる主人公ヴィエの妻ゴルデとして一ヶ月間舞台に立ちました。不調をおして演じきった舞台ですが、関係者に病気のことを悟られることは一切ありませんでした。上月は病魔と闘い、十月に再手術。医者友人に輸血してもらいながら年末恒例のプリンスホテルのディナーショーで変わらず熱唱し、それが最後の舞台となりました。

平成十一年（一九九九）三月二十五日、上月は二十一世紀の夜明けを待たずにまるで風のように去りました。享年五十八歳。全国の上月晃ファン、ふるさと山鹿にとっても痛恨の出来事でした。人は亡くなって初めてその人の真の価値がわかるという言葉がありますが、訃報を聞いて真っ先にお悔やみの葉書を下さった森繁久彌をはじめ、告別式の後にも彼女の死を悼んで自宅にお参りに来る人が絶えませんでした。その中の一人、坂東玉三郎も自らを「上月さんの宝塚時代からの大ファン」と言っていて、これほど各界の多くの人から認められ、慕われていたことに家族も改めて驚かされました。

神様どうぞどうぞお願い

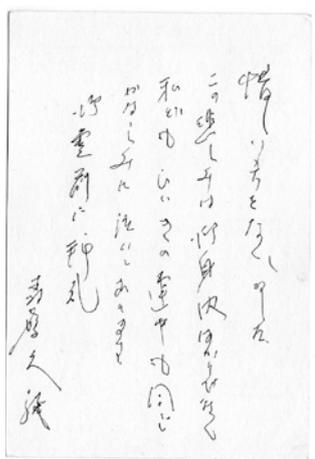
歌う時間をください

もう一度命を燃やすため：

（ピアフ「私の神様」原題 MON DIEU）

思えば、上月が歌ったエディット・ピアフの歌がそのまま上月の命の叫びでした。それはまた、生きたくても生きられない人の命への願いと尊さを歌い上げた、上月晃のメッセージでもあったのです。

上月晃、愛称ゴンちゃん。今彼女は原口家累代の墓に、両親とともに静かに眠っています。



森繁久彌から遺族にあてたハガキ（惜しい方をなくしました/この悲しみは御身内ばかりではなく/私どもひいきの連中も同じ/かなしみに泣いております/御霊前に拝礼/森繁久彌）

## ふるさと山鹿にかけの思い 〜上月晃の功績〜

山鹿では取り壊しの危機にあった芝居小屋八千代座が修復されて復活し、今では観光のシンボルとなっています。

明治四十三年に落成した八千代座は、昭和五十〜六十年にかけて老朽化が進み、娯楽の多様化と相まってほとんど利用されなくなっていました。この時期、八千代座は解体が保存かが議論されていました。昭和六十三年（一九八八）上月晃は、八千代座復興のために舞台に立ちました。小学校の時から三十八年ぶりの八千代座出演でした。その時上月は、八千代座の価値を伝えて、復興のお手伝いをしてほしいと永六輔に頼み、一緒に舞台に出てもら

# 年表 History

|                  |                                  |
|------------------|----------------------------------|
| 昭和十五年<br>(一九四〇)  | 原口辰起とカメコの三女として生まれる               |
| 昭和二十二年<br>(一九四七) | 山鹿小学校入学                          |
| 昭和二十八年<br>(一九五三) | 山鹿中学校入学                          |
| 昭和三十一年<br>(一九五六) | 山鹿高校入学、徒手体操部入部                   |
| 昭和三十三年<br>(一九五八) | 山鹿高校三年時に宝塚音楽学校入学                 |
| 昭和三十五年<br>(一九六〇) | 宝塚歌劇団に入団、「春の踊り」で初舞台              |
| 昭和三十九年<br>(一九六四) | 「日本の旋律」の歌で第十九回芸術祭奨励賞受賞           |
| 昭和四〇年<br>(一九六五)  | 「ラ・グラナダ」で星組トップスターになる             |
| 昭和四十五年<br>(一九七〇) | 新宿コマ劇場「ザ・ビッグワン」を最後に宝塚歌劇団退団       |
| 昭和五〇年<br>(一九七五)  | パリのフォーリー・ベルジェール劇場で東洋人として初主演(三年間) |

いました。東京の文化庁にも何度も足を運び、八千代座の復興に力を尽くしました。  
坂東玉三郎の公演などを経て今や全国的に有名になった八千代座は、上月晃をはじめとする多くの人々の努力で保存され続けたことで、今日の隆盛を迎えているのです。

|                  |                                      |
|------------------|--------------------------------------|
| 昭和五十四年<br>(一九七九) | ミュージカル「ラ・マンチャの男」アルドンサ役で文化庁芸術祭優秀賞受賞   |
| 昭和五十八年<br>(一九八三) | 「ラ・マンチャの男」で菊田一男演劇賞受賞                 |
| 昭和六十三年<br>(一九八八) | 八千代座復興支援のため八千代座舞台出演(平成二年に二度目の出演)     |
| 平成七年<br>(一九九五)   | エディット・ピアフ「命燃え尽きて」、熊本県立劇場「上月晃リサイタル」公演 |
| 平成十二年<br>(一九九九)  | 大腸がんのため死去、五十八歳                       |

## 主なテレビドラマ出演

|                  |                                    |
|------------------|------------------------------------|
| 昭和四十四年<br>(一九六九) | NHK大河ドラマ「天と地と」(石坂浩二主演)             |
| 昭和四十六年<br>(一九七二) | NHK大河ドラマ「春の坂道」(中村錦之助一翌年萬屋錦之介と改名)主演 |
| 昭和四十六年<br>(一九七二) | 「大忠臣蔵」(三船敏郎主演)                     |
| 昭和五〇年<br>(一九七五)  | 「水戸黄門」(東野英治郎主演)                    |
| 昭和六十三年<br>(一九八八) | 「暴れん坊將軍」(松平健主演)                    |



八千代座の舞台上に立ち保存を訴える上月

### 参考文献

上月晃『ふりむかないで』報知新聞社、1971年  
上月晃『エディット・ピアフ～愛の叫び～』キング・レコード、1993年  
ファンクラブ会報  
『新補山鹿市史』2004年  
那須照弘『痛快! 番長署長一代望郷編』書肆侃侃房、2012年

取材協力、写真提供 (敬称略・50音順)

片柳木の実、柴田洋一、清水真由美、高野勅子、友澤登喜子、原口了子